対談

〝保育学〟事始（その一）

―臨床と教育のあわいに―

守永英子（保育者 お茶の水女子大附属幼稚園）

野田幸江（臨床家 愛育研究所）

保育とは、臨床と教育のあわいに成立する営みではないだろうか。それは、臨床家の徹底した対象の受容を必要とし、同時に、教育者の価値を目指す前進志向が要求される。子ども自身の伸びる力と自己治癒力に対するゆるぎない信頼は、臨床の原理に通じ、彼らの前で行く手を示して、傍にいる大人としての責任を全うしようとする点では教育者と道を同じくする。保育者とは、この二つの極の間で右に左に振れながら、絶妙のバランスを保ち続ける振子のような存在と言えないだろうか。

ところで、幼児という小さく柔かな対象と生活を共にするとき、保育者のエネルギーは、行く手を指し示すことにもまして、その対象に寄り添うことに向けられねばならない。既存の文化価値に依りかかって声高に叫ぶことは、保育者にふさわしからぬ行為であり、それより、子どもらの背丈に合わせ、彼らの目の高さから、何かよきものをまさぐり出していくことが必要となる。保育者という振子が、教育の極にもまして、臨床の極により大きく傾くとしても、それは、理の当然と言えるのではないか。

ひたすらに子どもをみつめ、共に生きようとする保育者と臨床家の間には、重なり合うところが大きい。かと言って、

決してぴったりと同じになってしまいはしないだろう。お二人の親しい保育者と臨床家の間で、「忌憚のないおしゃべり」を交わして頂いたのは、保育と臨床に共通するエッセンスを探ると同時にこの微妙なちがいをもかいま見たい、という私どもの願いに基いている。

そして、お二人の「おしゃべり」は、私どもの期待に充分に答えてくれた。語られたことがらの中には、保育の基本原理が含まれていると同時に、その奥義もまた、示唆されている。「子どもをみつめる」とは、まさしく保育の始めであり、終りであると言うことになろうか。

（本田記）

第一課　ひたすらに子どもと向き合う

――何からお話し頂きましょうか。

最近、印象に残っている子どものことからでも……。

守永　三歳の時、散々泣かれた子どもがあったの。どうして泣くのかわからないけど、自分の思いこみとちがうと、かんしゃくが起こるらしいのね。

仲のよい女のお友達がやっと出来て、やれ〳〵と思ったら、今度は、その子といつも一緒じゃなきゃイヤ、何をするのもその子の隣じゃなきゃイヤ、ってわけね。とにかく、毎日、かんしゃくの連続で泣きわめき……。

野田　あの時は、ずい分慎重に気を配ってらしたわね。翌日、園に現われたとき、その子が、スッと入れるかどうかって……。

守永　そうねえ。その子の椅子と、仲のよい女の子の椅子を、それとなくくっつけておくとか、色々やったわ。

もちろん、卒業する頃には、直ってしまいましたけどね。四歳の秋頃まではそうだった。その子と一緒だと安定するんでしょうね。

野田　それだけ細々（こまごま）と配慮しながら、何でもないような顔してるんですものね。いつも感じとしては、偶然、二人がくっついたようになってるわけ。しかも、附属幼稚園は座席が決まってるわけじゃなし、椅子に名前が付いているのでもないのに、二人がいつも坐る椅子をチャンと見つけて、くっつけておくなんて、まさに、子どもの目を持たなきゃ出来ないことでしょうね。

守永　一日中泣きわめく子どもの傍で、組全体が不安定になり、私自身も困惑する……。それがイヤで、必死になったら、自ずから、子どもの見ているものが見えてきた、ということでしょうか。お座布団とか、一寸した手がかりを活かしてね。

その子のためになんて言うより、とにかく、その状況を変えようと懸命だった。

泣かずにはいられないその子をわかって上げたいと思うし、だからと言って、「好きなだけ泣きわめきなさい」という気持ちにはなれないでしょう。わがままだと決めつけたりするのではなく、何とか泣かないですむようにと……。

だから、椅子を並べたりしたのも、単なるテクニックじゃないの。一々、つまらないことにかんしゃくを起こさずに、幼稚園って楽しいことが一杯あるんだから、それに気付いてほしいって気持ち。何とか、その子と気持ちを出会わせることで、泣かなくなればと思って……。

野田　そのあたり、大事だと思うわ。あなたのお話聞くたびに、ワァー大変だ、何とかならないかナあって思っていた。

守永　お菓子を入れる箱を作って、それに名前を書いてくれって言うから、書いて上げたら、自分の思っていたような大きさじゃなかったのね。そこで「ウワアーン」でしょ。そんなことのくり返しで、よく野田さんに相談したわね。

それが、卒業の頃はね。自分の要求を皆の前で言葉でチャンと言えるのね。皆で羽根つきしていて、自分の順番を抜かされたの。そしたら、言葉で整然と抗議してるんですもの。「アー　成長したナ」って思いました。

野田　私までホッとしたりして……。

守永　今学期も一人、くいつく、たたく、ひっかく、蹴る、……。そんな子の相手をしています。人と一寸いきちがうと、たたいたり、ひっかいたり、そしてウワーンって泣くの。私が声をかけると、私に向かってきて、たたいたり、蹴ったり。そして廊下に出ていって入ってこなくなっちゃうの。

ところが、一学期の終り頃ね、いつものように喧嘩して泣いて、暴れていて、私が見ていると、私の方に泣きながらやって来るようになったの。一学期でそこまで変ったのね。

つまり、大人って必ず自分の意に反するようなこと、例えば「たしなめる」とか「とめる」とか、そんなことをするんじゃないかという感じ方が、少し改まったということでしょうね。大人っていうのは、「自分が困ったときに、何かしらプラスになるような働きをしてくれるんじゃないか」という心が芽生えてきたんじゃないかと思えるの。

違うかしら？　これ、私としては、ずい分　プラスの変化のようにとらえているけど……。

――その子と保育者の間に、いわゆる「見えない糸」とでも言うべきものが出来かけているということでしょうか。

「見えない糸」で結ばれ合うことも重要ですが、時には、そんな糸なんかパーッと離して、子どもは子どもでスパッと好きなところに飛んで行く。そんな瞬間も必要ではないでしょうか。

野田　私はそう思えない。糸で縛っているって感覚があるなら、パーッと離すってこともあるでしょうけど、「見えない糸」でつながるというのは、決して縛っていることじゃないでしょう。切るにも何も、どこにいったって、どうしたって、どんなに遠くへパーッと飛んでったって、やはりお互いはつながり合ってるってことでしょう。

守永　片方から糸を出して、縛りつけるんじゃなくて、糸は両方から出てるんですものね。私の伸ばした手と、子どもの伸ばした手が、上手く両方からつながるべくしてつながったってことでしょう。

野田　私なんか臨床で一人を相手にすることが多いでしょう。時間も限られているし……。だから、向かい合っている時間は、すごく重要なの。「見えない糸」なんていう間接的な感じより、もっと、直接的。とにかく全身全霊でその子と一緒にいたいと思ってるのね。自分の時間じゃなくて、「相手に上げた時間」って感じね。

守永　ただ、ひたすら向き合っているって感じね。

野田　そうね。だから、その子がいま大人を必要としていないなら、そのことに向き合って、私は傍を離れるの。でも、その子が、チラッとでも必要とした瞬間を見落してはならないでしょう。遠くにいて、その子の方を見ないで、でも、一生懸命、その子のことを「感じよう」としているわけね。

もちろん、見落とすこともあるけど、感じていること

に全力投球するのね。一時間くらいだから出来るのかも知れないけど……。

子どもによっては、傍にいてほしい、別の子どもは、遠くにいてほしい、見ていてほしい、見ていてほしくない、様々ね。でも、遠くにいて、さりげなくしていると、チラッとこちらを見てくれることがあるの、「あゝ、彼の生きる世界に、私がいるんだナ」って感じられるわね。そんな時、フッと目が合ったりすると、両方の喜びがパチッとぶつかるみたい。

守永 わかるナー。だから、いろんな時、あなたの意見や承認を求めたくなるんだわ。大体において、一致するのよね。

野田 たいてい、同じこと考えてるから、承認しちゃうわけね。

守永 でも、余り同じだと、逆に信じられなくなるでしょ。だから、時々、角度をかえて、「ちがいを目立たせてみる」こともしたりする。(笑)

大体は同じ、でも、この先が一寸ちがう、ってことがあるでしょう。時々ね。

第二課　一人と大勢と……

野田 いつか、二人で、子どものグループに入ったことがあったでしょう。あのとき、私は、一人の子どもと遊びはじめると、全くその子と向かい合っちゃうのね。真中にデンと腰をおろして、自分の前にいる子とだけ平気で遊んでるみたいな感じ、セラピストには、たいていあるでしょう。

ところが、守永さんは坐る位置から違うのね。子ども皆が視野に入るところにチャンと位置するの。違うナーって感心したことの一つ。

守永 大勢を相手にするのは、習慣ですもの、実習生なんかは、自分のまわりの二人か三人に夢中になりますね。この間なんかも、お弁当の時、左隣の子と話していて右隣の子が牛乳をひっくり返したのに全然気がつかないの。気がつかなかったことに、自分でびっくりしてたけど。

野田 自分の話してる子どもに夢中になってたのね。

守永 そうね。でも、それでも、何かアクシデントが起こりかけたら、気付くのが保育者の世界ね。それは、当り前

のことでしょう。

子どもに、「先生、後にも目があるの？」って言われたけど……。

野田　子どもにそれを感じさせるのは大変なことね。だから、子どもの方は安心するのね。いま見ていないけど、見てくれるって……。

向き合っている子どもにひたすら注目し、同時に、まわりにも注意がいっていることが大事ね。まわりにばかり注意がいくと、空々しい対し方になるみたい。私たちが保育者を見ると、時として、そんな白々しさを感じることもないではない……。

守永　自分でもそう思うこともある。空々しいことを言っちゃいけないナって……。

野田　そこのところが微妙ね。いわゆる家庭の親が新聞を見ながら、今夜のおかずのことを考え、そして、子どもに相槌を打っているのと同じかナ？

守永　それがいわゆる生活性とも言えるわね。幼稚園の自由な生活ってのは、そういうものでもあるわけ。あれこれと気を配る大人が傍にいて、生活を整えてくれて、自分たちは自分たちで遊びを作っていくみたいなところが……。

だから、それはそれでいいのよ。

それより、保育者の側に計画みたいなものが強くあって、そちらに心が向いている時、つまり、何日までに○○をしてしまいたい、なんて思いが強いとき、傍の子どもたちに、時として空々しくなっちゃうのね。それがイヤなの。

野田　そういう空々しさは、避けてほしいわ。それじゃ、子どもよりも計画が前に出ちゃうじゃないの。

守永　そうなの。その辺をハッキリさせておくことは必要なの。大勢を相手にするために起こることと、自分の計画を優先させるために起こることは違うのですもの。

大勢を相手にしているというのは、大勢の一人々々に向き合っているのだから……。

野田　そうねえ、また、あんまり違わなくなっちゃった。(笑)

第三課　子どもと出会うための技術とは

――一にも二にも、子どもと向き合う、心を重ね合う

ということが重要なわけですね。ところで、その場合、テクニックのようなものはどうお考えでしょうか。

守永 子どもとの接し方に技術とか技法とかいう形で一般化されるようなものがあるのかどうかということですね。

――保育者は一人々々違うし、子どもも一人々々違うわけですね。違う大人と違う子どもの二人だけの出会い方があるのが当然で、一般的な標準型というのがあり得るのか、つまり、こういうのがよいかかわり方だというのがあるのでしょうか。

例えば、アメリカの教科書などには、極めて明快に、「否定的な言葉は使うな」とか、「一度言ったことは変えるな」と書いてありますが……。

守永 すべての人が同じやり方ということはあり得ないでしょうが……。かと言って、純粋に個性に任すことが出来るかどうかって問題でしょうね。例えば、大変華やかな性格、スター的とでも言うのかしら、自分がいつも目立ってしまうというタイプの人がありますね。そういう人は、子どもとの関係も、自分のアイデアや技術を先に出してやっていく形を取りやすいみたいですね。

だからと言って、スター性そのものはその人の持ち味なんだから、否定するわけにはいかない、全然違った人になれるわけがないし、なったつもりになるのはもっと悲劇でしょ。だから……。

でも、ともかく、子どもの前へ前へと出るんじゃなく、相手の後に立つというあり方が、自分の中に見出せるようじゃないとダメでしょうね。相手を生かすことが出来ないようでは、そもそもがおかしいでしょ。

野田 確かにそうね。でも、それは、技術なんてものじゃなくて、もっと根本的なものじゃなくて、もっと根本的なものでしょう。子どもと向き合うときの基本的な構えというか、姿勢というか……。

それよか、私、いつも感心するのは、守永さんは、言葉を大切に使うってことなの。しかも、それをわりと意識的にね。

例えば、自分が追いこまれてイラ〳〵してくるような言葉は、なるべく使わないとか……。「片づけましょう」と言って、子どもに「イヤ」と言われる、それでも片づけさせなきゃならないとなると、子どもに「イヤ」という意志表示をさせておいて、それを拒否しなきゃならな

い。そこで、そうならない言葉の使い方を考えるっていうようなこと。それは、一つの技術って言えるでしょ。

守永　そうね、自分も子どもも不愉快にならないような技巧かな。

野田　そういうことって、すごく貴重よ。セラピーの基本にもなるんだけど、自分が不愉快になってイラ〳〵しだしたら駄目なの。そんな自分は受け入れにくいでしょう。自分が受け入れられなかったら、相手が受け入れられる筈がないでしょ。

何かを投げかけるなら、よく考えて、自分が不愉快にならないよう、相手を追いこまないような工夫をする。それは、言葉のテクニックとして、とても大切だと思うわ。

こういうことは、一応、一般化出来るんじゃないかしら。「こう言いなさい」ではなくて、「自分を不愉快にするような相手の行動を誘発しないように、言葉を選んで使いましょう」というのは、一般的な法則になり得るでしょう。

そこまで考えずに、イライラしちゃって、結局は、子どもが受け入れられなくなる人も多いんだもの。だから、生まれっ放しのあるがままの自分でいるんじゃなく、自分を変えてみることも大切だと思うの。自分が変ることで関係も変るんだもの。

守永　さっきのスター性にも通じるでしょ。スター性そのものは否定しないけど、「私は、こういう性格だから」って開き直ってるんじゃなくて、「だけど一寸変ってみようかな」って考えることは大切でしょ。

行き詰まった状況を変えるには、自分が変ってみることが一つですものね。最も、これは、野田さんの臨床から教わったことなの。

野田　この間のお話、ホラ、鋸で切ってた子どものこと。面白い例だったわ。

守永　とめなくてはいけないようなことばかり、次々としてしまう子どもがいたの。だから、いつもとめてばっかり。こうなってくると、子どもにとっても、私は、うっとうしい存在でしょうね。すると、どうしても行き詰まってくるから、どこかを変えなきゃと思ったけど、相手はそんなに急には変えられないでしょ。だから、私を変えてみることにしたの。

一人の子どもが、鋸で木を切ってたら、その子が下に

寝ころんで、木くづが落ちてくるのを見上げてるの。でも、一寸、危いのね。いつ、鋸がはずれるかもしれないし……。何とか止めないでおきたい、「いつも〳〵とめてばかり」という関係を打ち破りたいと思ってたから、「寝ころがって見上げる」ということを承認することにして、少し机をずらして距離を作り、座布団をあてがって、「これを枕にしてここから見るといいわ」って、言ったの。その子、とても嬉しそうな顔をしたわ。寝ころがって、下から、木の切り落とされるのを見るっていうのは、彼の見つけた行動でしょう。だから、そこに、私が一生けんめい接近しようとしたわけ。それがわかったのか、嬉しそうな表情が現われたのね。それで私は、そばにいた子どもに、「あなたも見る?」なんて一寸、誘ったの。

でも、野田さんに、「何故、あなたも一緒に寝ころんで見て上げなかったの」って言われちゃったんですけどね……。その辺が、一対一ではないためのあいまいさかも知れませんね。

野田 そうね。でも、そうやって、相手に合わせて、自分の基準を変えていくことは大切ね。その気持ちは、臨床も保育も共通でしょう。

守永 その時の嬉しそうな顔、ちゃんとわかるのね。そして、「ああよかった、関係が少し変った」って思えるの。客観的に説明しろって言われても困るけど……。

でも、確実に、その後の動きは変りますね。第一、私自身がとても嬉しくなってくるし……。そんな気持ちの通い合いが、二〇年も保育をさせ続けたのかナ(笑)

野田 そういうのを、まさしく「共感の成立」って言うんでしょうね。何を感じ合ってるかって言うより、両方とも、お互いの関係を肯定して「よいことが起こるぞ」みたいに感じられる瞬間って、本当にステキね。

それが逆になると、もう悪循環。いつか、余りほしくもないのにやたらに紙をほしがる子どもがいてね、出してやると「四角い紙」とか「大きいの」とか、次々と要求するの。それを叶えてやっても、本当に紙がほしいわけじゃないらしく、一寸使っては捨てて、また要求するの。そうなってくると、こっちも、せっかく出して上げたのに、なんてイラ〳〵し出すでしょ。そうなってくると、形の上では、紙を出して上げていても、本当は受け入れていないことになるのね。

そこで、ある日、思いきって、自分を切りかえたの。「今日は、言われたことに応じるのではなく、最初から、何でも要求してごらんなさいって態度を取ろう」って。子どもにもハッキリ言ったの。「今日は、あなたの言うこと、何でも聞いて上げるから、何でも言ってみて？何をして上げたらいい？」って。

子どもが、何かして止めそうになったら「今度は、何がほしい？」って言うわけ。

守永　先手必勝みたいね、（笑）

野田　そうするうち、子どもの方が、今日はとにかく、自分のことを専一考えていてくれるらしいって、実感を持ったのね。ぐっと安定してきて、関係が変ったわ。そこらは一つの工夫、技法と言えば言えるんじゃないかな。

守永　そうね。でも、表面的な、小手先の技術ではないけれど……。つまり、子どもとひたすら向き合い、関係を上手くつけていくために、あれこれと工夫すること、それが保育技術ということになるのでしょうね。

野田　若い人たちと話しているとね、子どもとの関係の持ち方にベストの方法、正統派とでも言うべきものがあるかのように考えているらしいのね。それを教えてほしい、なんて言われることがよくあるでしょう。

守永　そうですね。最初にきちんと接し方を教えておいてほしかった、なんて言われるけど……。

野田　私たちだって、接し方の虎の巻を持っているわけじゃないのにね。

若いときって、子どもと向き合っていても、これでいいのか、間違っていないか、なんて、絶えず気になるでしょう。それは、謙虚に見えるけど、もしかしたら、自分と子どもの関係をしっかり見つめるんじゃなくて、他者の基準や他人の眼を気にしていることかもしれないのね。

私も以前はそうだった。自分の動きは、あれでよかったのか、なんて、絶えず思ってたけど……。

だけど、それがふっきれたの。自分の思うままやって、相手の反応をよく見続ければよい、それ以外にないということに気付いたの。仮りに間違ったとしてもね、相手の反応を見て、間違いだったと気がつける自分だったら、そこでやり直して、次のことをやって上げればいいんだ。だから、一々、間違っていないかどうか、なんて気にし続けなくてもいいんだって気付いたとき、もの凄くふっ切れたの。

結局は、「私の動き方」じゃなくて、「二人の動き」二人で作り出す相互関係なのね。一つ々々で終っていくものではなくて、一つが次を生み、それがまた次を生んで、つながっていくものなのね。

私は、ある日、突然、それに気付いたみたい。インサイトって言うのかな。「ああ、見えたっ」って思ったの。わかる？

守永　わかるなあ。私も最近ね。唯一最上の方法、つまり正統的接し方なんてどこにもなくて、自分が考えて、精一杯に向き合ってやってみる。それに対する相手の動きがあって、それに対する自分の動きがあって、相互的、発展的に動きがつながっていく。そんな手応えを確かめながら、一つ一つやっていくしかない、って気付いたの。

知識とか経験は、豊かな人と乏しい人があるでしょう。でも、いま、私が向き合っている子どもと、私との関係についての正解は、他の誰にもわかってはいないんですものね。解答を出すのは、飽くまで、私とこの子どもの二人ですよ。

野田　二人で答えを出していくんだナって、気が付いたときの素晴しさ！　何と言ったらいいのかな。

守永　そうねえ、本当。その辺から、保育に腰がすわってきたみたい。

でも、いろ〳〵悩むと相談相手がほしくなるわ。答えを出して貰うんじゃなくて、自分のやっていることに、別の光を当てるために……。そこで、野田さんに話すわけ。それだけの時間のない時は辛いわ。ゆっくり、自分を見つめ返すひまもないうちに、翌日が来て、そんなくり返しの中で、深みにはまってしまうの。

違った光が、ポッと当ると、自分を変えるきっかけがつかみやすいのね。その点、私には、臨床から学ぶものがとても多い。

野田　そして私は、保育から頂戴してるってわけ。それで二人は離れられないのね。（笑）

――そこで、保育と臨床は、益々、接近し、重なり合うというわけですね。このあたりで、入門講座（？）の一回目は、おしまいに致しましょう。後はまた、次回に……。

どうもありがとうございました。

（記録　皆川美恵子
文責　本田和子）